

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17400

研究課題名(和文) 学習者の自律的な論理的思考を促すための国語科学習評価サイクルの実践的開発

研究課題名(英文) A practical development of Japanese learning assessment cycle for autonomous logical thinking

研究代表者

幸坂 健太郎 (Kentaro, Kosaka)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：20735253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、(1)学習者の自律的な論理的思考を促すためには、学習者の自分ごと認識が重要であることを理論的に示した点、(2)特に自律的な論理的思考力の育成が期待される中等教育段階の論説・評論の読みの指導における、論説・評論に自分ごと認識を持つ学習者を育てるための方法論を示した点、(3)実際の年間実践を通して、学習者の論説・評論に対する自分ごと認識を評価する学習評価サイクルを開発した点、である。

研究成果の概要(英文)：In this study, we made 3 findings: (1)Importance of self-relevance for autonomous logical thinking. (2)Suggestion of instructional method of reading with self-relevance, especially for Japanese reading education in secondary education in which we are aware of autonomous logical thinking. (3)Development of learning assessment cycle for learner's self-relevance.

研究分野：国語科教育学

キーワード：論説・評論の読み 自分ごと 認識 学習評価

### 1. 研究開始当初の背景

国語科教育では、義務教育段階で学習者に論理的思考力を身につけさせ、その後の日常生活・社会生活で、論理的思考を自ら進んで行う学習者の育成を目指した取り組みに継続して取り組んでいる。このような流れの中、申請者は、学習者の論理的思考方略の要素を明らかにし、その偏りや躓きを指摘・修正することで、学習者に自律的な論理的思考を行わせる指導の開発を行ってきた。

申請者は、学習者の方略の用い方を捉え、そこに指導者が介入していく個別指導や、学習者相互に学び合いを行わせることで、学習者間で互いに相手を適切な論理の読み取りへと導くような国語科一斉指導を実践し、自律的な論理的思考を行う指導論を構築してきた。ただし、これまでの申請者の指導は、確かに学習者の論理的思考方略の偏りや躓きを修正することはできたが、それはあくまで論理について学習した直後だから出来たことであり、その後の生活でも自律的な論理的思考を行っていただける学習者を育成できたとは言いがたい。

この原因の1つとして考えられるのが、学習者の自律的な論理的思考を促すための評価の在り方が確立されていなかったという点である。申請者が行った実践は、指導者—学習者間、または学習者間で、相手の論理的思考方略に形成的評価を加え、自律的な論理的思考を行う学習者の育成を目指すものであった。しかし、相手が自律的に論理的思考を行っているかどうかをどう把握し、そしてその把握をどう学習者にフィードバックすればよいか明確に位置づいていなかった。自律的な論理的思考に関する国語科研究は、メタ認知との関連で近年着手されてきている。しかし、現在はメタ認知を促進するための有効な指導方法に研究の重点があり、論理的思考の自律性の評価の在り方については、十分に検討されていない。

小・中学校で国語科論理教育を行っている教員は、学習者の論理的思考の自律性を評価する方法が、すぐにでも実践できる姿で示されることを望んでいる。現場の要請に応えるべく、どのように学習者の自律的な論理的思考の程度を把握し、またその把握をどのようにフィードバックしていけば彼らの自律的な論理的思考を促せるかという評価の在り方を、理論に基づきながらも具体的な実践レベルで明らかにする必要がある。

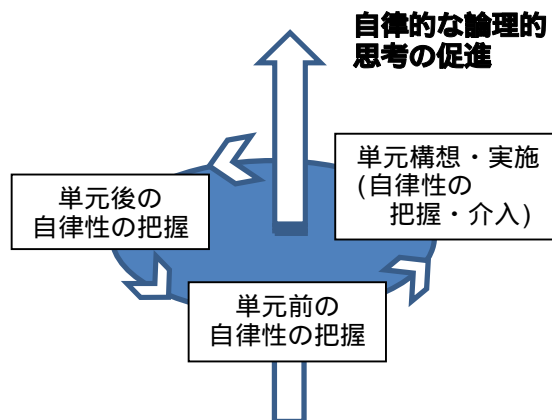


図1 学習評価サイクルの概要

### 2. 研究の目的

本研究では、“学習者の自律的な論理的思考を促す国語科学習評価サイクル”の開発を目指す(図1参照)。このサイクルではまず、単元前に学習者の論理的思考の自律性を把握する。それに基づき、単元中には形成的な学習者の自律性の把握とその把握に基づいた介入を行う。単元後、学習者の自律性の高まりを総括的に評価し、それをもとに次の単元を行う。このサイクルを埋め込んだ単元を繰り返し、学習者の自律的な論理的思考を促すことを目指す。

全体の目標：

小・中学校の国語科教育における学習者の自律的な論理的思考を促すための学習評価サイクルを、実践現場で妥当性・信頼性を持つものとして開発する。

下位目標：

国語科において、学習者が自律的に論理的思考を行っている状態とはどういう状態を指すのか、明確な概念規定を行う。

下位目標：

学習者の論理的思考の自律性の度合いを捉え、それを踏まえて自律的な論理的思考を促すフィードバックを行う学習評価サイクルを、仮説的に考案する。

下位目標：

考案した学習評価サイクルが妥当性・信頼性を持つものであることを、小・中学校の単元レベル・年間レベルで実践を行う中で検証する。

### 3. 研究の方法

本研究は、次の3つのプロジェクト(PJ ~ )を立ち上げて研究を進める。

PJ : 概念規定(下位目標 に対応)

自律的な論理的思考概念の規定

PJ : 評価考案 (下位目標 に対応)

自律的な論理的思考を促す学習評価サイクルの考案

PJ : 単元実践 (下位目標 に対応)

学習評価サイクルを埋め込んだ単元レベルの実践による、妥当性・信頼性の検証

PJ : 年間実践 (下位目標 に対応)

学習評価サイクルを埋め込んだ年間レベルの実践による、妥当性・信頼性の検証

#### 4. 研究成果

本研究を進める中で、当初の研究計画を変更し、研究の範囲を次の通り限定することとした。

(1) 中等教育段階のみを対象とする。

(2) 論説・評論の読みにおける論理的思考を対象とする。

まず(1)の限定をしたのは、PJを進める中で、学習者の自律的な論理的思考には発達段階ごとの特性があることが明らかになったためである。特に中等教育段階の学習者にとって自律的な論理的思考力育成が急務であると考え、本研究で扱う発達段階を中等教育段階とした。

また、(2)の限定をしたのは、国語科教育における領域の中で、特に論説・評論を読むことにおいて論理的思考力の育成が期待されているためである。

さて、以上のような研究範囲の限定のもと、本研究の成果は、次の3点に見出せる。

1点目は、学習者の自律的な論理的思考を促すためには、学習者の情緒的な思考の側面、特に学習者が対象を自分ごととして捉えることが重要であるという知見を理論的に示した点である。学習者の自律的な思考を捉える理論的枠組みである自己調整学習理論を検討する中で、その自己調整サイクルを駆動する動機づけが重要であることが明らかになった。論説・評論の読みでいえば、そのテキストが自分に関わると捉える認識、つまり自分ごと認識が動機づけとなり、学習者の自律的な思考が促されることを理論的に明らかにした。

2点目は、論説・評論の読みの指導において、論説・評論を自分ごととして捉える学習者を育成するための方法論を、授業レベルで明らかにしたことである。本研究では、論説・評論の読みにおける自分ごと認識を、次の三つに整理して捉えた。この観点

学習者の自分ごと認識を評価する際の規準となる。

- ・テキストを 実感する こと
- ・テキストを 引き受ける こと
- ・テキストによる説得の 相手になる こと

その上で、これら三つの観点に基づく授業実践例の提案や、学習評価サイクルで用いるループリック案の作成を行った。

3点目は、提案した授業実践例やループリック案に基づき、実際の年間実践を行い、授業実践や学習評価サイクルの効果について実践的に検証した点である。具体的には、中国地方にある県立高校の国語教諭に協力を仰ぎ、2017年6月・11月、2018年2月にそれぞれ1単元ずつ、計3単元の論説・評論の読みの指導を実践し、論説・評論を自分ごととして捉え、自律的に論理的思考を働かせる学習者を育てるための実践を行った。その結果、授業展開の具体像の構築や自分ごと認識を捉えるための分析方法については一定の成果を得ることができたものの、単元間を通して自分ごと認識を高めていくというカリキュラムの視点での構想に課題が残されていることが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

幸坂健太郎 (2017) 「論理的な文章を書くことと「わたしレポート」—自分ごととして書く学習者を育てるために—」『田中宏幸先生御退官記念論文集』pp.20-25 (査読無)

幸坂健太郎 (2016) 「国語科で指導される言語論理の感情的側面の検討—「感情論理」(L.チオンピ)の理論を援用して—」『語学文学』No.55, pp.33-45 (査読無)

幸坂健太郎 (2015) 「論説・評論を自分ごとにする国語科の読みの指導理論—学習者の読みの「構え」の形成を中心に—」『国語教育思想研究』No.11, pp.21-32 (査読無)

[学会発表](計5件)

幸坂健太郎 (2017) 「論説・評論の読みにおける自分ごと認識の理論的検討—中東国語科で育成を目指す資質・能力を踏まえて—」第132回全国大学国語教育学会 (於：盛岡)

幸坂健太郎・難波健悟 (2017) 「論説・評

論の読みの指導でいかに学習者の 自分ごと 認識を引き出すか—高校1年生を対象とした実践—」第133回 全国大学国語教育学会（於：福山）

幸坂健太郎（2016）「論説・評論の自律的な読みに資する 自分ごと 認識についての検討」第130回 全国大学国語教育学会（於：新潟）

幸坂健太郎（2015）「論説・評論の読みを自分ごと にする国語科指導の構想」平成27年度語学文学会（於：函館）

幸坂健太郎（2015）「国語科論理的思考力育成における評価のダイナミズム」日本教育心理学会 第57回総会（於：新潟）

〔図書〕（計1件）

岡谷英明編著（2017）『現場と結ぶ教職シリーズ 15 学びを創る教育評価』あいり出版（全243ページ，pp.64-76 執筆担当）

## 6．研究組織

### (1)研究代表者

幸坂 健太郎（KOSAKA Kentaro）  
北海道教育大学・教育学部・講師  
研究者番号：20735253

### (2)研究協力者

宮本 浩治（MIYAMOTO Koji）  
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授  
難波 健悟（NAMBA Kengo）  
岡山県立津山東高等学校・教諭